

和刻集

波之部

廿四

津田文庫

文庫 1

1604

21







少く論せり明律の尊長の遺言に従ふとも杖一百と云ふ○使琉球録  
 子為親喪數月不食肉死者以中元前後日溪水浴其屍去腐肉收其骸骨以  
 布帛纏之裹以葦草觀土而殯上不起墳君王及陪臣之家則以骸置藏於山穴中  
 仍以木板為小牖戶歲時祭掃則啓鑰視之蓋恐木朽而骨露也と云ふ○  
 明史真臘國の下に死する貧者ハ海濱に置ハ羣鴉啄ハ尽シ家人其骨を拾ヒて鳥  
 葬トシテ之ヲ○千百年眼ハ今檢葬昏以己亥之日用葬取出謹按春秋之際此  
 日葬者凡十餘人此則葬不擇日可致也と云ふ○蝦夷ハ墓以テヤク  
 といふ

枕草紙云々ちとつたうまわせんとなんといふ豆減りて温飽と

煮とのこつり沸湯の轉音とや

傍題とちり字のこく傍側の題減らむ減らふ近來風体は題  
 の物とくふくしてここのとよとつたう減らふ又款数の中は同事  
 のおととくともる也○俗語のでんうだいと出傍題ある一

東鑑右大臣家鶴岡拜賀時供奉行列の中は放免四人と云

えりり檢非違使廳の下部とつたう行行列の各自は其分上と專に務る  
 然して列の人数は離れ領の乱れぬやうに或は闘諍と鎮め或は下部の  
 頗る煩々ひある時は人数は加りり勢ゆる減りて行列と放ら免るゝあり  
 常よりふりて下部とて檢非違使よつてゆる事今昔物語と云ふ  
 了中右記は元永二年四月六日申云去年賀茂祭檢非違使所相具之廳下部  
 等或有鏡鈴等或着錦紅打衣如此過差欲停止と又明月記は御靈會は神  
 輿渡一種の風流流施すと云ふ放免也冠服と心任は用おて貴人の河  
 さまと云ふ又ハ故事流造り物とするふんとりて加茂祭は此事あり後  
 は疫流送る御靈會と云ふやのつけお減らさる也徒然草はつらめん  
 のつけおとらると是ある一壽命院抄は今深草祭といはるやの櫻所の  
 放免りの類うといふ祭の鉾流持者の手かまりの人今時の練物れ如く可笑  
 と云ふ也と云ふ元正紀は所奏罪人並從坐者宜成放免と云ふ宋史太  
 祖紀は廣南有買人男女為奴婢轉傭利者並放免と云ふなり

はえ 哥よと云ふあふんえふと云ふ映字の糸之花の夕ぐえ露のよえな

さふくよりの柴字をよむも通せり日本紀の哥といさうくそふ万葉集とい  
 やさうくえよとよあり盛栄のそふく○日本紀は黄をよあり生のそふ也万葉  
 集はゆるそふゆ新撰字鏡はひこむゆとよあり○鯨魚といふ速きもの  
 ふれい名とせるふく○本草は状如柳葉とそふ今柳ぐんふといふ出羽にて  
 ちよくやといふ東國うまくとふといふと會津の柳葉水は落く魚と  
 ふるわくくといふ處くよとといふ新撰字鏡は鮎といふ伊勢鮎川御厨  
 白干鮎煮塩鮎類聚雜要はえゆ和名鮎をよあり埃囊按は鮎とそふ  
 えとよありちよといふはくもといふ宇治拾遺鯨といふとよあるも心得き  
 ○南風といふ翻譯名義集は婆厘此云風神といふよ本けことといふ凱風  
 也琉球もくえといふ京よていふつとといふ中国の船人五月の南風とあ  
 くえといふ六月の末の風とあはくといふ西國よて東南の風をおあやくえ  
 とといふ  
 とえぐくく 映くくく此系思のまじ日記は野の行幸までとくえんくま  
 くさあひくく○くえやうと意同く在菴派讀るは延くくくのそふや

△はくくひまりる 史記は切齒と讀く日本紀も同く

△はく 浅く跡はくやこころあてはくふといふ助語也○陵もはくといふ  
 万葉集はえゆ菅萬葉はく葬所とよあり墓とよむ跡くもふくそ  
 こころとぬくたうくといふそやの跡の遺きるよりの名あふく伎然草は  
 と古き墓をすくして田くふそぬくのくふくかぬるやかふくそとら  
 り文選古詩は古墓摯為田松柏推為新くそえたり上世之陵墓假山轅形  
 之上無加物近代墓所は社は建る者ありねくそ墓の穢所也墓所は上身は一日  
 のひぐれくははくあふくくくく松は五枝松くそ五株くは故きるり  
 ○はくのいりり舒明紀は墓所之所とそゆ蓋古く一周の間窓主及宗族悉く  
 廬を家上は構く又人といふ守くくむはくとそえたり万葉集はも河島の白玉  
 子と葬る時の款は草枕旅杯もくそありぬ君ゆきとそゆ礼の厚きそつ  
 ○源氏小治くくくらの草をけくくする文集は古墳何世人不識姓兼名化  
 作路傍土年々春草生といふ意也○墓の碑を立るは三位以上也其以下の樹  
 と殖ふ事令はそえたり墓は物と藏ふ事ハ饒速日命の神去たまふ時

神衣と帯と手貫と三物とハ登美白庭村ハ葬とてとめて御墓作とて  
のさすひとると本とんす一終制の事ハ孝徳紀とくく一其極とハ天と奉  
て御身とふせたまひ一三種の物と其国と葬飲したふハ列仙傳とふ  
黄帝の家と唯有劔舄在とらふ如一〇平語と彼とら此はふとらふもは  
その略也鄙語とてやとらふとてこの轉也〇はらのゆくゆるぬとら俗語  
ハ計略の行ふりやとらふとら一〇稻のりりハの草ハ葉集とてゆ今と東  
国とて稻減るると一ハ二ハ三ハとらふ草あり

はらふ 商量計略とらふ靈異記と怒をよみ又瑞成よむ音と也又稱も  
よめと新撰字鏡と腹とよむ謨とはりことよめり歐蕪手簡と計料減  
とらふとて用わたり〇表とてめとらふのうとらふもとらふとよむ一ハ理言の  
たすとも也〇源氏とらふりとらふともえゆとらふこととらふ〇とらふも同神  
代紀と計とよめりらふ交る也或ハ進止とよめり

とらふり 等秤減らふ等子とてとらふ稱とよめり知輕重之器也宋の淳和中  
ハ法物減制とてつる是也權ハ古秤也姓氏錄ハ吳權其名云波質理吳国以

懸定萬とてとらふ六帖と

人々といふといふといふといふといふといふといふといふといふといふといふ

〇伊勢物語といつと減とらふといふといふといふ也限量の氣俗と足手減とかりと  
といふ倭名抄と蹴血といかりといふといふと照射といふとらふも同意也土佐といふ今  
といふ語也〇おかこうり減衡石といふ〇日本紀と行減といふり拾芥抄と十六兩  
爲一斤小一斤也三斤爲大一斤四十八兩也といふ今百六十九減一斤といふとら減唐目  
といふ薬物減かといふと物とよりて異あり倭物ハ大しハ二百三十文減一斤といふと受  
と藥種とよりて大と異とらふ木綿と平野目あり煙草破磨と大坂西国備後の別あり  
茶と宇治目山目里目の品あり舊事紀と大小量雜器といふとら減古語拾遺といふ大  
小斤といふり物ハ輕重と量る器のといふとら大小といふとら用る所ハ鑄斧鑄  
の類といふといふ也といふ日本紀といふとら劔の名ハ大葉列とある減古事記といふ  
大量と作とら詩經の伐柯伐柯其則不遠の意と近一〇昔ハ稻と秤といふ  
一といふ古今集と秋の田といふといふとてとらけぬといふといふとら六帖と  
つるはとらといふといふ稻のといふとらといふといふといふといふといふ

くがつ 神代紀の廢とよつうけふつと音義通せりよて廢渠槽と式と種放と  
とえとつ ○江戸よて西北の風とくがらとつ

はらえ 所字許字とよつう何はらうと許よらふよのこくわどくの二意あり二

十むろ重祓とと曉むろとつと物なふと程也とむろとつと鳴る

てふ身也又いつむろ入相とつ二日むろふあくとつ比とつよも通てこれ

とりく物と量ふよりある詞あるとよそ可又容ともよつういくらばらうもあ

と推てらふ辞也字書よ許の約與之也又可也容也とてえとつ史記よ如も用可の

如一 ○古今集よはらうをと留て一哥三首あり而巳矣とつけ一助語よ似とつ

はらうども三首ありて上よ同一

くがひ 翼とらふ万葉集よ羽我比又羽易とつ又白たのけはねとつかてと

もよめとつ打交とつる羽のやと右より左を掩ふ者ハ雄左より右と掩ふとの

唯あるよ一雨雅よええとつ ○貝子とつよ萬貝の鬚漢土よも貝齒とつ

海巴も同一紫色のののを紫貝とつよ上品也ハ丈嵩のとのを美之紙とつ

て光滑とつとつと是と用う文房圖贊よ貝光祿とつハ眼科よてハ貝香

とつ ○万葉集よ春日ある羽買山とつ

はかせ 博士乃轉音也和名抄よえゆ大博士ハ大学博士也小博士あり平

家物語よもえゆ日本紀よ儒字をよめるも天月一四道の儒と称とつ

紀傳明經明法義道とつ也同紀よ博士とつとつとつとつとつ源氏ハ筆の

尻とつはせとえとつ ○墨譜とつよ博士のするまふんといつとつ或ハ拍子の

音轉やとつとつハ意也とつとつ ○舟の名よとつハ越前舟とつとつとつとつ

と鶴よ似とつ ○博士木とつハ事伊勢年中行事よとつとつ

はらう 日本紀よ刀祝詞よ横刀とつあり万葉集よ御佩とつとつ是也けら

せとつとつ軍家よ主位よ称とつとつ名目とつ ○源氏ハあぬとつとつ物花

鳥よ皇子の御はらうとつ供せとつとつ陽明門院とつとつとつとつ

くがき 宝鈔とつとつ世祖の時よ始とつとつ飛とつ通用とつとつとつ

錢神論とつとつ无翼而飛とつとつ札使とつとつ猪幣也後醍醐帝の時よ始

とつ 紙錢とつ行とつとつ太平記よえゆ我知券物の始とつとつとつ

とつ 墓原の冢墓ハ土封せとつとつ孟軻之母其舍近墓とつとつ西







もろく日本紀乃慕摺衣万葉集の榛原手折て初んとも此後  
もろくも衣よわせしものある物ありしと和名抄の郡名々名所  
もろくもあやうくえて榛原とありしとよみ榛沢といふことありし  
指しや杜子美う椋林礙日吟風葉と作するものことありし南部  
ら此實は尾張の山とてしる深家を用う○脛とよみ靈異記の脛成  
み和名抄の脛とよみ新撰字鏡の脛趾とよみことありし古今俳諧  
予主佐日記の脛とよみあけてしる脛とよみことありし脛の  
今しる脛とよみ○衣乃色とよみ表とよみ裏とよみと榛葉とよみ  
此萩のころ乃時の女房乃服とよみ○南宮とよみと稱する小之目先  
とよみと稱するものありしを觀つてしるを萩の文とよみ○別は萩萩  
と稱する一種あり短草とよみ合明草とよみ仙臺とよみと稱するは  
也といふことありし○下野国足利郡和泉村八幡山より村正真秀  
氏の伐取しるの木の内は大神宮の三字とよみ安永丙申の春内宮車館  
に來り正しく天造の物ありし奇瑞目か驚しぬ小野の榛原は皇祖天神

成程の神武紀よる也

元日屋中と掃除せし新よまるけ陽氣とよみはがれ意あり  
よそ二日と掃初とよみ五雜俎の閩中乃俗元日より五日まで糞土と除き  
是令如願の意とよみ如願の事歳時記に云く伊勢神宮乃俗に客去  
く直に掃除せしるも意近し

はろくよる

万葉集よる又ゆ又奉仕国守拂部等ともあり掃除清浄  
よそ世と治むる事といふ西土よも大丈夫當掃除天下ふと云く御門  
祭祝詞は待防拂却といふも同し

△くく

吐も掃もかきくけこうてはくあり○太刀の帯字靴のハ穿履とい  
着字かろくといふれ日本紀は佩刀も持剣も訓同し万葉集は劍着と  
たらくといふり又紀は所帯をけくせるとありかす反く○薄の音を  
續日本後紀は禁金銀薄泥といふ○神祇伯と伯とのもいふ兼良公類聚は  
神祇伯雖亮閤中被御吉服異他之義也といふ家記神祇伯雖遭心  
不着服不觸穢五旬心卷籠居後擇言日出仕專隨神齋といふ延暦

中參議大中臣諸魚進家譜云中臣朝臣任神祇伯者是天照大神之主也黑世相羨遺喪不解者、勅雖不窮喪紀不可供神事、宜令修其服、是也

はぐ

矢とく、規字とあり神代紀、作字も、く、う、に、弦、く、く、も

く、く、う、う、万葉集、つ、弦、取、を、げ、と、あり、又、木綿、の、所、作、を、と、げ、と、あり、拷の皮を剥て木綿にするをりて、○皮の剥、う、い、剥、と、あり、○衣を奪ふとはぐといふ、襦字とあり、靈異記、襦とす、い、あ、ひ、と、あり、○木を合せて造るをはぐといふ、矢、の、意、同、○蝦夷、う、て、半、ち、と、い、音、の、轉、あり、○俗語、は、ぎ、は、く、わ、る、と、い、い、か、み、意、あり、

ぐち

新猿樂記、小博打とあり、今、ぐ、ち、う、つ、と、い、重言也、其、

と、ぐ、ち、と、の、い、つ、と、う、つ、つ、物、語、と、あり、○大和物語、と、く、や、う、と、て、わ、や、も、見、牙、も、う、く、ま、れ、足、は、む、か、ん、か、と、い、行、ん、と、と、と、え、ん、う、る、も、く、え、う、う、博、打、と、や、ぐ、ち、や、れ、な、や、○博、打、は、内、の、一、半、錢、と、い、ふ、事、東、鑑、と、い、四、半、打、と、い、ふ、事、あり、

ぐ、む

羽合の糸也、万葉集、羽裳とあり、菅家万葉、羽裳とあり、

又、く、く、む、と、い、古語拾遺、育字を、あり、左傳注、今、撫、育、人、曰、卵、翼、言、如、鳥、卵、也、と、い、え、う、

はくふほ

大己貴命の天羽車大鸞、の、り、て、妻、と、た、り、事、舊事記、と、

え、う、駿河風土記、ふ、有、渡、濱、は、羽、衣、の、事、此、羽、車、也、と、謬、と、傳、う、る、み、一、○羽車草、の、車、軸、と、い、う、鳥、鳳、花、と、い、○内侍所、と、御、移、徙、車、の、時、天、羽、車、に、載、奉、は、常、に、温、明、殿、の、内、高、床、の、上、に、鎮、ま、り、其、天、羽、車、の、座、傍、簾、外、に、置、ま、今、羽、車、の、臺、四、方、有、欄、干、下、車、也、本、大、己、貴、命、の、作、也、

く、ら、め

和名抄、黒齒とあり、源氏物語、紫式部、日記、榮花物語、

小、え、う、海、人、藻、芥、に、鳥、羽、院、御、代、以、前、の、男、の、眉、を、め、く、鬚、を、け、さ、く、鉄、と、つ、くる、事、一、切、是、ふ、と、い、う、山、海、經、に、東、海、有、黒、齒、國、其、俗、婦、人、齒、黒、漆、と、い、え、う、和、名、抄、も、文、選、注、を、引、て、黒、齒、國、在、東、海、中、其、土、俗、以、草、漆、齒、故、曰、黒、齒、と、今、婦、人、有、黒、齒、具、故、取、之、と、書、い、い、頃、の、時、す、く、い、官、家、の、子、姓、も、か、ね、つ、く、ま、い、あ、さ、り、と、い、え、う、塩、裏、抄、に、漣、字、成、り、韻、會、に、漣、乳、汁、也、一、云、水、濁、也、と、い、一、説、骨、を、見、り、す、成、不、祥、と、い、る、よ、り、齒、は、漆、丸、を、漆、

る法ありとていふ○史の世家は黒齒を大吳の国風とて華夷通商考は  
東京交趾も黒齒ある事をつりていふ事をも喰ふ故とていふ

くろくろぬ 和名秋の帛とあり音をとる之令義解は帛衣謂白練衣と  
る之集解は我朝以白色為貴色天服也とて之を禁秘録は帛御裝束とも  
之胡曹欽は帛御服神事之着御夏生冬練張とて之を弘仁の詔よりて諸  
會は黄檀漆の御袍と用ひしとていふも又もこれに桐竹鳳凰麒麟乃御文も此時  
は始すはるべき事とていふ

△ばけ 神代紀は術とあり俗語のむけるばけともいふも世にありてむけるは  
化ばけと魅むけるもの妖物とあり伊勢物語のおよもや一口よくりりり  
しよと是也むけるの俗語も同一蝦夷といふはむとていふ○ばけのか  
といふ俗語ありかり皮骨小對といふ俗乃套語之狐皮とていふ

とげー 烈をよめりけしむるはむとて通ずる神代紀は慷慨  
ともいふあり  
むけとありていふ 演義文は露馬脚也といふとて宇治拾遺よりて撰

△はこ のくけと射するおもふといふれは化乃ありりてお性よかるといふ事ありて  
昔箱の教とて益籠の義もふた及は之○古事記は械とて日本

紀は斗と訓せり事同一○世はききふふと事とはこといふは清器と和名秋は  
志のはことといふ事ありて宇治拾遺にもある女の人よこよみうせりははこ  
ぬ日といふ事とありてあるよりていふ五雜俎は北人設厠用虎子と○箱崎  
は筑前糟屋郡也平宗盛乃安德帝を奉りて葬る所也○箱の浦は和泉日根郡  
箱作村に土佐日記より

はこえ 玉くけはこれ浦のまきぬ日ち海と鏡とたれん事とていふ  
運とていふ又搬とていふ日本紀は轉とていふ箱よりて出する訓もや書經  
よ国々の土産とはこといふ事あり

はこえ 袍乃後の袋とていふ或は菅衣とていふ枕草紙にこのわけとていふ  
ひきはこえとていふ又女のつがさうとていふはあはこえとていふ  
とていふ事ありていふ引あげとていふ

はごろも 羽衣也駿河風土記丹波風土記曾丹集ふくとて神女は羽衣の事

を載りて天上皇都より降るとりて天女ともいふ也一 搜神記廣輿記等一  
似する事多しなりとれは本つきたる事と云まはるはるの下の下は有渡濱の  
故事ハ万葉集にも見えたり能因法師の哥よ

うとれ濱天乃羽衣ひりててうりうの袖やうのうりて

伶人家よ東遊といふは此故事とりて儻曲よ作るとりて是れは電裳  
羽衣曲と撰せり也一 文選注よ電裳羽衣起於開元盛於天宝也と云ゆ 電  
裳羽衣曲の舞の装束ふと楊升庵うりて博識と云うと不知様あり然るは  
小野篁入唐の時此曲を親くりて逐一書記し嵯峨帝へ奉りて自筆の録あり  
てが内裏炎上の時焼失しぬと云う可憐なりと云 昨詹仲和の雪舟の画  
も富士山の題せり詩にも東風吾欲東遊去時到松原竊羽衣と作るとりて東  
遊の曲と聞傳てていふるあり也一 ○いんかをよみ合せると梵書のご事也 ○河  
内の天の川近江乃餘湖のうりてあり曾根好忠

よこの海よとつたかたん女子の天の羽衣けりてんやと

○草よ羽衣と称するは草よ用ふ著ことりてのこきり草と大小は異也

はこや乃やは

万葉集よ出づ歌姑射山之わりの御門と仙洞と奉りたりとれは

はして後ひ奉るなりと 莊子に出たり郭注よ身中至寶之山也と云ゆ俊成卿

りらとひ浦をぬきかるともははれ山と云ふる也

はこぶのわろ

運丁の氣延喜式よ運脚と云うり運丁の字は字大衆よアを

りの金葉集よ

いつとものはこぶのわろと云ふるはこぶの里人收やひり

△くさな

日本紀よ谷字とよみりる地名今も伊勢近江肥後陸奥ふ

くふ此名あり尾張乃桶はさはくはくも同一 ○真名伊勢物語よ追字  
を填り殿の間と云うりて姓の間字と云うりては端狭間のさくは

一 又大和物語よ下すは乃はさぬ日中行事よ御湯殿乃と云ふも  
そ西行の哥よ岩のはさはとも見えたり兼邦秋よ磐田の神劔盗一 道行  
劔成返一 捨く逃る路に向くさよと云今海東郡迫間村は劔返迫間  
と云ふ是也

△ささむ

夾字と訓せり夾路夾岸ふと是也羽狭めるはさるる一 ぬる互む

あり西傍よりとるまよいらうよて間介攝ふととるまよいらうよむも同し  
まふ友む之俗語のはさうるまよいらうよむも意同し又介のつと同一一夫曰介と  
又ゆるの音也○碁よ幹とよあり○蜻蛉日記よみくぐく一夾二はまみとえ  
ゆ串よ夾とて献するよりいら座よ意同し

はさき  
剪刀とて夾て切乃具之和名杖よ鏡刀とてえとらうふはさきと新  
撰字鏡よ鉗とはしとよあるもさみ又しあまの同義之洞天清録よ倭製摺  
鏡剪刀又ゆ○かうむさき髪とさき也

ばさき  
大平記よむけの風又とらうふはさきとよふけ又扇とら羽乃む  
けの繪ふとらえり扱折羅とらり今も粗扇とむさきとらり千手経若為  
降伏一切大魔神者當於跋折羅とらえり

むさけ  
婆娑氣とらり一文選注よ婆娑放逸只とらえり又新撰字鏡よ婆  
娑とてまろがとらもろがとらもろがとら

△はし  
端をよめて始の糸也字彙よ首也萌也始也緒也とら由又音へん冕  
よ同一日本紀よ間とよあり間あは端あり糸通せりよて万葉集よ端ととら間

の意あるも多し古今集よ

本にもあし草ととあぬ竹のあはしと我身のありぬとあり

四声字苑よ竹非草非木とてえり出羽とてはしと濁し呼之梯橋とよむも相  
間つ所とわさきととりて名とらあり階も義同し和名杖よ階とらえり古事記よ  
埜をよあり正韻よ曲岸頭也とてはし神名式よ椅をよむ字書の本義よありと字  
書小崎の橋也とありの埜と謬とらや○橋よ石橋土橋板橋圓木橋高橋浮橋打  
橋懸橋反橋舟橋棚橋吳橋韓橋等の名あり防州岩国よ錦帶橋あり  
錦山より流る川よら故よ名く日本第一の風景其結構比とらふ  
俗よとらふんばしとらふと俗よ山の富士滝那智橋の錦帶とらり○催  
馬樂よ橋乃凡とらふも今もらふはしつめ○野史よ推古帝乃時帰化せ  
路子又巧掛長橋令造遺三河國八脰長橋水内曲橋木籠梯遠江國濱名橋  
會津關川橋塙岩猿橋等其外一百八十橋とらえり○五雜俎よ天下之橋  
吾聞洛陽橋為最計橋長三百六十丈堊江大橋二百餘丈とてゆ○箸も食  
する橋ふる魚とらよて御箸の渡るとらふ辞あり新撰字鏡よ筴もよあり今

も大嘗會の箸古尚方の箸も竹を用ひたる事内膳式姓氏録に云々なり中  
 世も親王大臣の箸は白箸を用ひたる事著書に云々あり後世漆箸たふあ  
 り文正乃比の箸は金をのべにけづりて用ひ今民間に象牙骨箸と用ひよ  
 至りり騎奢乃甚しと恨る一象牙の箸と牙筋とて八仙草の白紙にて包  
 中を朱紙にて巻箸の先を銀にてはりたる事貞觀乃末に白箸の翁あり姓  
 氏を云々白箸を賣ともて業とも百餘歳の市隱あり一日本朝遼史云々  
 〇八月朔日十五日禁中にて秋の箸を用ひたる事あり拾遺集に子  
 日松をけりてた人物と出ると云々銀筋匙の内裏式云々白銅箸金御  
 箸の儀式帳云々〇梅の花さうをさうをさうをさうをさうをさうをさうを  
 大和物語云々〇信濃の箸をけりて云々  
 〇帝所用之金筋云々〇言行法云々我為云々ぬ友を云々者云々破志也云々  
 〇助語云々平家物語云々女將殿の御心云々  
 類也

底ぬらと池に生てふみくりふいろと云々

はく日本紀萬葉集に多し愛字より愛妻ありつらり云々

細くこの略もや神代紀の我愛之妹と云々きふよとのこと云々

宇治の橋姫も愛姫の義と云々〇新撰字鏡に橋をけり本もぬと云々

古事記に彈矢の語云々又撥及の義は云々

はくた 偶に對し音をけり又半をけり間の義も同一竹取物語云々

立もはくた居も云々たもて云々元真集に

我宿に植てき云々女即花人けりたる秋乃野云々

〇召仕のものを云々上臈云々下臈云々ぬ意云々

いつり今武家云々女と云々〇はくた色指貫云々胡曹云々

経緯共薄紫と云々

はら 柱とらふ擗座の義とらふ楹も同一 ○神に幾柱とらふ  
 事古事記神代紀に云えりより座字とらふ佛に一軀をひとはらとよ  
 み事欽明紀に云え三代實錄に太政大臣一柱とも云えり古事記に子之  
 木とらふ事云ゆ私記に蓋古以貴人喻於木故謂神及貴人為一柱一木矣以賤人  
 喻於草故謂天下人民為青人草也と云えり ○大く柱とらふ家々祭  
 ふ所の大國主命の尊像豊肥あるより人の豊満肥大あるをも大國と謂名を  
 る如く家の中より大柱とも大國柱とらふ ○神代紀に柱は太く高く  
 云え万葉集に真木柱太き心ともいふる男心と大國柱は太くて  
 太しとらふ俗諺あるも是也 ○但馬二方郡濱坂に柱所あり街頭に大柱と  
 堅何の世に起ると知ると古来此柱とて人の損傷とらふ

はら 走とらふ義とらふれいとすに同一 故にも常にもとらふは各段讀  
 よらふはとらふ習へ新撰字鏡に逆ととらふかることより日光より行  
 車とはらるとらふ ○刀の自より抜出ふとけらふ玉乃盤と走ふとらふ  
 う如く列仙傳に其人刀自墮而自走とも云えり ○火りて物を焼てけらふ声

と焼声と云えり ○案藝の俗語に身の疼むとけらふとらふ

とらめ 續紀宣命萬葉集に云ゆ神代紀に云とらめ或は本とらめ又始初  
 とらめり端芽の義ある處に 出羽とらめ志を清て唱ふ又肇甫載哉造助とも  
 始と注と始者とも云ゆ

はらとら 端部の義あること物に半部とらふ花鳥と下らうとけら板か  
 と打て上と部と造ら外あるやうにあらるとらふとらふ ○車とらふも同一  
 とらとら 日本紀に間人ともあり氏姓ともいふ今も丹波とらふ所もある  
 又埜部ともあり土師人の義あり

とらたり 鶴成らふ和名按に云也このはれ嶋也といたりとらふ本の速鷹の  
 義轉していともあり又とらふ又鷹の家とらふたいとも是也とい  
 たり ○とらたりとらふ詞は鷹成つとらふ体より

はらけや 万葉集に愛哉と書ふ又早布屋師とも云ゆら助語とらふ  
 やららりの轉とらふ日本紀にいはらきとらふとも云えり  
 とらむら 万葉集に父母成乃まらく著向弟乃命と云えり著ら一對な



このゆゑとあるなり今俗著折屈の兄弟とらふ是古萩の折箸かといひ折  
屈先て一対ともたをしく又童謡には一折箸すぬとれといひ著折末折と  
らふある一それ古の時著竹幾株かといひ一も今の二條と一前折と  
らふてくまの細く削成る一筋とよりうめく食を取るるといふ

はたふー 無間の家とて物に腐心めと意とや一説端方無てふ言也せん  
うかかといふや源氏ふはーあめとんゆ心ある意也和泉式部日記  
うききの神もさういひけりひりめくめちよわくはけりといふ

○真名伊勢物語に強の字節用集に魁魁の字をよめり何よ出るよや  
字乃多と心得る

はたふー 走書ふる一源氏ふ点ふふよはーと書と又ゆ又徒然草  
よんえあり東坡の真如立行如行草如走といふ意ふて草書をぬめる  
語に龍蛇走ともいふり文集に走筆選詩債といふ句あり

とががふふと 天武紀に圭冠といふり私記に烏帽子也といひ榛子の形  
烏帽子に似よりよて名くるよや今の侍烏帽子といふ説いふはゆらん○京

△はす

室町烏帽子折の看板に十とあるも圭の字の略なるといふ

馳とよむ羽する疾速といふ○蓮といふはちす乃略也はす根  
藕の根も花葉も藕生するものへはとめせん藕粉の説部よんゆせん織

字あるといふすれといひ藕糸かぞと荷真といふ侍中群要に御手水時有り荷  
葉○うきはとあり浮萍のれ○荷葉の酒とて茎より飲ひ香氣ありて

よつとと陶器とあると酉陽雜俎に碧珠杯といふ○はすふとくふと  
らふ斜といひ蓮のまねをとりといふや昂鼻といはすといひ鼻もといひ

又寒鼻ともいひ近江乃湖といはすといふ鼻ありてその鼻の形をけり嘉興  
こといひ海とす川はすの呂あり較ばすの吻に粒あり方いひ胴けといひ○小児

の頭瘡といふは狐といひ蟾拱頭也といひ蟾の土蜂也  
とび 弓と彌といひ矢と苦といふ端末の矢と古事記に弓端をゆくと

とよめり弦のこくりの所をも苦といふ方宝全書にええとら箭の矢苦といひ  
ふ皆水精也但諒闇の角苦也○稍はまのひ弓腦といひ○俗語にけはす

陸機詩「離合非有常譬彼弦與管」と見えたり○木よとすあり柴山査子の如く紅葉をばや

△はせ 長谷又谷字とよめる泊瀬乃略也泊瀬の枕詞隠口とらるり

長谷と義訓せしむる一長谷をよめる古事記見えたり○愛宕郡の長谷はたつたこととふ公任卿の別荘の地也○和名抄玉茎をとせと訓せりをばせ

がの條考ふゆ一○鎌倉乃海物はせあり栗刺をみる如く貝の刺其刺と紀州の香箸貝とらふ

はせつゝ 文部とよめる和名抄杖部ともあり日本紀塗部を訓せるも

誤ふはちうとらふ

△はそで 端袖の義ありとらふ

△くゝ 助語の辞とらふぬの轉あり一並くくゝ詞之將字とよめる抑

然之辞と注せり抑互語の辞といつらうと神代紀抑ともよめり又將抑ともえゆ西土乃文よも上句よ抑字と用わ下句よ將字と用ふあり或抑將と連用せり古今集よ

時鳥初声聞へありさふくぬ一定らぬをきくはけ

ことありもさるるの意あり日本紀万葉集ふとよ為當二字ともよめり真名伊勢物語に當將二字を填ら伊勢物語に女とありとも思つてととと又万葉集よはとやともらう○端をけとらふ一たふ同○機を繒物の略称とらふと繒をよめり羽手の義と日本紀よ出て機も繒よと出らるるふと一小しきげと花機とてゆもとらふ腰機とらう○旗の羽岳の義あり一旗よ幾流とらふ事延喜式よ見えたり考工記に幡旗旗之総名也と見え少錦御旗に元弘の初帝笠置山に幸とらふ時を始と見え太平記よ見えたり赤白二幅の絹上よ懸日月とらう○幟はけとらふ一○祭儀よ旗を用ふに神代紀よ見え葬儀よ用ふに常陸風土記よ見えたり○高市郡よ波多神社あり冬野村よまの履仲紀よらふ羽田と同一とらふ同郡よ波多野井神社あり羽内村よまの姓氏録よ波多祀波多造あり○神代紀に鰐又鰐皆せよめり魚の旗之和名抄よ俗よらふひまきとらふと神代よ魚を鰐廣物鰐狹物とらふひまき○狩衣よらふも鰐字を用う○陸田をらふ火田と古草葉を焼

てこやせーよりの名也畑字畠字ハ二合セー字ハ或ハ壑田也といふ○姓もらう  
脇屋義助の部将ハ畑時能あり○はこくくろふ詞ハ碯乃字をよむら子書の子義あり  
は果してのふふふーつうくはつこくくろふ碯字とよめるは義を取ハ演義文とい  
ハる撲地の意也○万葉集吹黄の刀自うよありー波多の横山れいふふといふ伊  
勢一志郡の波多あり大和よりれ道すぢいふふ山川よ多ー神鳳抄ハ大正作  
ふ一説ハ山邊郡の仲峯山也其山下とら野とらふ又式神波多神社も仲峯山村  
よあり○土佐の畑ハ土御門院の徒えんませー所也幡多郡よく保元の初ハ姓音  
院師長公も流され後醍醐帝のハ宮も配流ハたう

はぶ 萬葉集ハ皮字をよめうひはぶきはぶの靴ハ端のふもや○新撰字鏡  
ハ脱とけぶふめうけーこめう○秦とよむハ秦氏始て絹綿と造りて肌膚とあ  
くむらより訓せう古語拾遺ハええう○永正記ハ神宮法不知姓職掌号秦  
氏例也といふ

はこけ 倭名鏡ハ層とよめう皮方のふ也肌膚ハこといふあり  
ハこけ 圃ハこけつうを孔子も老圃といふまう日本紀ハ畝をよむ常ハ畠

とよめうけいものふ物を殖つけらるふふふー○和名抄ハ刷とよめう若聞集ハ馬  
の事ハけけかこといふ世継物語ハ御馬めー出てうせとけせふとせと  
めうとええう今も物のこい著うを落とよめうけつとらう○大手をけけけとい  
つハ開く義也○和名抄ハ疥癩をよめう

はこて 古事記ハ大宮の成とらとてとえゆ彼津くこのふも万葉集ハ國之  
畫ハ國之波多とらとえゆ雲のはこてとらふもかとうといふ後ハ略し  
てとてとらふといふもはこてとらふ如ハふもや果ハ通ら俗ハまを  
はこてとらふと畫とぬ意也○轡手ハふもあり日本紀の哥ハ轡ハけとてとらふ  
ハ○機手のふもあり堀川百首ハえゆ

はこて 和名抄ハ轡を訓ハ飼馬籠也と注とらハ旅行の馬より出らる語  
ふふーとらと馬とらふ事宇治拾遺ハええう行旅ハ人とやとして馬ハ養ふ  
の制とらとらハ事孝徳紀ハええうとらハ刷籠のふもとらハ馬刷とらとら  
和名抄ハええ又俗旅籠の字を用うともら今昔物語小宿とらけけと開て物  
ふとらとらとら今風のハちがう西土の書ハも行旅籠ハ使とらとら

今旅店とはぐざやといふ館驛也○俗に機をはぐざといふも一は乃如○石見國よりまんの本流とていふ

はぐざ 神代紀に真字債字徴字ふとありけりふ意通る今も出羽に

此語あり○庭訓の徴使定使と見えり年貢に就てらむ也

はぐざ 雪霜の秋よりあり大日経疏に鉢鉏羅葉也大佛頂云白也と見えり續後

撰集に庭とていふ雪降よりありと見えり舊説にまゝとて通るといふまゝとて

梵語也越後よりやくらく降雪試して東武より綿帽子雪といふは中国に

くといふ雪といふ越路よりやく雪といふ西國に花をく雪といふ○竹のて

んとまゝといふの葉也といふと見えり葉密の葉たるといふ○万葉集にまゝと

のいまのころころとといふ用の詞法体よりいひける也といふ

まゝと 裸をよめる層明の葉古事記にまゝ

はぐざ 新撰字鏡に既よりあり後既も同一と見えりありの葉也○神社に

まゝとまゝありといふ事あり西王よりいふ事也

はぐざと 幅員といふ埃囊抄に布のまゝとばりといふ事平家物語よりいふ

ばりかへるえり機張ある一々集観教僧都

水うみよ秋の山邊のうみまゝいけとていひり錦とやん

まゝとち 中臣被辞に生層断死層断と見えり人を傷まゝとすつひ死を

りて刀をためとれとていふ殺害のまゝと見えりあり

はぐざと 神代紀に織紐とよめる万葉集に織はぐざとあり

まゝとあり 日本紀和名抄に旒をよめる旗脚の葉也

はぐざと 令義解に真幡すは別雷神の靈神也といふ山城國紀伊郡真幡す

神社に中島村城南神乃森にあり月清集に雨を城南神に祈りて

民の戸も神の恵とていふ事一都の南宮居せりといふ

祭蘇文の柳文にみえ旗蘇神と祭ふ禮に虎鈴経にみえり熙朝樂事にも

霜降之日帥府致祭旗蘇之神とせり

△とぢ 恥辱又慙をよめる万葉集にくもけりけり靈異記に堀もよあり○は

ちをすくぐへ雪恥と書り韻會に雪の洗也と見えり○埃囊抄に金婿とはぐざといふ

といふありはぐざといふ事あり○恥を與ふるといふ事ありといふ古語に

古事記に令見唇音と云え神代紀に令音唇唇と云えてあれはば見えよと云あり  
はらふく 源氏物語にけちみくらふと云えさう蜂と吹く如くの意さうと云  
らふ詞あり東坡も虎をけちみくらふと云ふの蜂をふくと云ふと云ふ細流は蜂と云ふ  
と云ふ如くと云えさう

とちまね 頭の鉢と纏の糸也古に抹額と云ふ○蜂巻の草と云ふ物の鑑成著て  
其腰と纏との也鑑と著する体の細腰にたる成とてさう名く大和の古寺に古代の物  
遺まらうと云

はらすのまひ 和名世に蜜と訓せらるるひの延の糸もさう新撰字鏡に荷本の白  
くきと云ふ爾雅の注に茎下白弱在泥中者也と云ふ延喜式に荷葉雜葉七十五枚  
波斐四把半と云ふ耦牙也注と後撰集に

蓮葉のまひさう人のまひさうむせよと云ふひらけ中よ生つ  
頭照の説よと云ふ身と云ふと云ふ其心也と云ふ二糸を兼着の意也

△とつ 初と云ふひ端出の糸もさう三代實録に早をよめり○日本紀に泊字  
とよむひ舟をはつと云ふと云ふ是也と云ふと云ふ糸もさう○万葉集に極字と云ふさう

さうさうと云ふと云ふ古今集にまきえと云ふさうと云ふ是もさうと云ふ又おひと  
つれいともよめり○大魚の名と云ふ初よ出ふ意鮪の事あり其ちひと云ふ  
よと云ふと云ふ○定家卿鷹の哥よ

鳥羽の黒ぬのの巻やはつと云ふ是の三つあると云ふと云ふ

是に黒ぬのの巻の逸物あると云ふ八重羽の雉に三足の者ありく鷹と蹴と云  
と云ふと云ふ○と未夏琉球乃漂船と云ふ二つゆと云ふ八つと云ふ船の道具ある  
一海道記に舟と云ふ渡と云ふもさうと云ふねはつをりちと云ふと云ふはよ水  
をさきと云ふと云ふと云ふ松字と云ふは是と云ふと云ふ船中よ用ゆる水と  
溜ふ桶と云ふと云ふと云ふ時よ用ゆると云ふと云ふ船中よ用ゆる水と

はつえ 古今集に梅乃と云ふと云ふ極枝の糸梢をらふと云ふと云ふ○万葉集に  
末枝をほつえと云ふと云ふに同一

とつり 廿日と云ふと云ふと云ふ轉と云ふと云ふ詞あり○廿日正月と云ふ事文  
類聚に江東俗語正月二十日為天穿以紅縷繫煎餅餅置屋上謂之補天穿と云  
えと云ふ女の鏡臺の祝よ廿日を用ゆる初顔祀と云ふと云ふと云ふと云ふ江東俗

日本けりし一甲胃の鏡開きも亦りと世日を用かか柄を祝ふ事とす○  
はつちとて一草のはつちよふと秋よむむつちの意ある一万余集よ小端を  
よめり

はつち 日本紀よ孫字裔字をよめり極子よ右舊事記よ裔孫とも又ゆ

はつち 祝詞式よ初穂倭姫世紀よ先穂ふとすう稲穂のすうありさうを神よ

ちのよる萬の物の初とも神よをるい志らうすそ三代實録よ錢の事よ所請作之早  
穂二十文と見えう或最花を訓せり天野氏の書よ又ゆ

はつち 顯昭説よ下人の物ふとけくさうと木とらふえと見えうされ舟とす

意よて泊木は養ふと後堀川百首に

ねん衣今ややはつちよけてちとかつととらうよとれありん

○辛ニシカラ螺殼の口よ長針乃左右よある物を名らると同意成一刺螺也とす○女官  
の服よもらう地白ゆのしめ地の如く小袖也やう内よさいれ目と称する官方より  
典侍やとて内々行事よ又ゆ○琉球よつととらふ針衝のふある一其俗  
以墨手を懸く種々の花卉の状とふすとらふ女の事と暇席の婦人唇小入墨す

る如し

はつち 古今集よ糸とつけ極き糸之俗よやつとらうもらう

とらうは ひとつせとかくもいらはつせうまの略也○二月初午の日と稲荷祭と

貫之家集よ延喜六年月次屏風歌の中よ二月初午いありうとてとらう所と見え  
よ古よまある一○頌集よ二月初午のやとら

いさうしと花とつと花の香を袖よけみつる罪もとある

とつちとてけり此日も花つとらふ事ありとや○新撰六帖よ

きとれや初午のちとらふ事ありとや

是ハ杉と挿頭花よすう平治物語よ大貳清盛いあり社よまありて各杉の  
枝を折てうらひの袖よとと見えう初午ありとある一事ありと  
有家のキよ

いふと山杉乃青葉をうとつ帰ふあるとらふの諸人

今も紀の熊野とて初午の日神をうととらふ古の遺事とて午の日を  
用ふい神の初て現きたすふ日ふれ永く祭日と見えうとらふ

つるる

春日祭年との二月初の申の日也堀川百首よ

二月の初申のやま日山岑とよむまていささする

はづら

恥をらふはつらうきももちりもはづら

今恥のまらう忝辱をよめつらういよすも四書蒙引に恥由内生辱自外

生とえり○つらうの森の山城心訓郡之和名抄に羽束をけつらうとよめり式羽

東師坐高御産日神社大宝元年波都賀志神社稲今俗恥しつらう社つらう

つらう心

和名抄に殿とよめり羽繕つらう心反つらう玉篇に嘲鳥治毛衣

とんゆ

△とて

古事記に最後の字とよめり万葉集に盡又終又竟をけつらう心

つらうともつらう極をけつらう心とよむはつらう心はつらう心とよめりつらう心

も同一朝忠集よ

人乃世の老とけつらう心せつらう心つらう心あつらう心ふけつらう心

○つらう心をてつらう心つらう心のつらう心とよめり堀川百首よ

宿りせよ朝こし稲をほつらう心つらう心をてつらう心つらう心

○俗の發語よつらう○神鳳抄に伊勢一志郡蕪原御厨波底御厨と載て今  
曾原の邊よ波底村あり式須底神社も一本須を波小作ふ是也

はての心

竟の日也日本紀に國忌日をよめり三代實錄に四十九日とよめり

玉笑零音よ人之初死以七日為忌一忌而七魂散故七々四十九日而七魂没矣とい

つらう大蔵一覽にも中有極多七々四十九日定結生とよめり拾遺集物名よ四十九

日減隱しつらう心つらう心敬ぬつらう心諸廻向清規式よ四十九日と大歎

忌つらう心谷響集よ七々日及百箇日一周忌第三年忌つらう心十五經に配せり

盖百箇日一周忌第三年儒者の卒突小祥大祥小准とよめり人七年以後

誰定めつらう心つらう心とよめり十三年忌もつらう心つらう心六甲

子終て七年十二支及て十三年と数つらう心つらう心胎藏界の十三院に象ふとい

つらう心五雜俎よも死毎七日則備三祭謂之過七至四十九日而止措紳礼法之

家不爾也死後朝夕上食至百日止つらう心つらう心今俗五十日といつらう心生よつらう心

つらう心如し源氏よ四十九日あるを細流よあつらう心つらう心つらう心三代實錄よ

つらう心つらう心名紋集よつらう心の事つらう心つらう心是也又一周忌とよめり源氏よ





てのふふあり ○花とのいひて櫻の事しるる後の事之鶴林玉露一洛陽人謂牡丹為花成都人謂海棠為花尊貴之也と云々録倉右大臣集一

みよけの山に入りし山人とありて云々花よあぐやせ

古今集菅家万葉ふとも櫻とよめる勿論云々花とのいよめるま百花と云々

よて詩も其意よえ云々 ○農家花と云ひ紅花之 ○三はふ四ふふたふ人の

行よ云々花の系よてめたるより詞も云々 ○鼻の初之物のはしめ事のこ

と皆はふと云つ鼻祖の系と通つ方言よ梁益之間謂鼻為祖とも云え韻會

よ人之胎胎鼻先受形故謂始祖為鼻祖と云え云々淡路三原郡鼻子山と云ひご

やまご云々 ○帝上廣談よ欲知時辰陰陽當別以鼻々中氣陽時在左陰時在

右亥子之交兩鼻俱通丹家謂玉洞雙開是也と云え云々 ○鼻根の奇なる元興寺

の僧守印入事と仁明紀よ記たり今も鼻々あり ○俗よ自負すと鼻と高う

と云々云々天狗の像と云て云々云々秋葉山の像ハ嘴長くと云々或ハ猿田彦

神の化神と云つ神代紀ハ鼻長と云々云々云々王鼻と稱するも圖一々

ふふ物ふふ一 ○源氏物語の所よ人々鼻のいも忘ましく心よ入ると云え云々

○奥義抄よ武陵のふふとて山のい 出る所と云せり今も所の名よふふとて  
はふふと云ふもの多し鼻田の云々山鼻ふと云ふ名義も同し ○花の御所ハ義  
満將軍の室町殿と云つ花鳥ハ室所新芽と云つ花の寺ハ訓郡大原野村の小塩山  
持勝寺と云つ西行法師の植し櫻あり長嘴菴の跡もあり

新撰字鏡よ施埃囊抄よ細常よ縹を云々碧を云々同色ハ皇侃西  
碧と云ひ一を玉元美ハ縹よ作まら花田の云々月草と云て縹を云々名くるよ  
や秋も月草のほろと云つ今の花の色と云つ華田の字夏候港賦よ云  
え云々はふ草ハ月草の異名ふり ○云々紙ふと云え云々  
日本紀よ紺を云々云々源氏よあ云々云々藍と云  
薄く云々云々口語よ云々云々 ○續後拾集よ

名河やあハ雲や結ハ置ハ花田の帯め云々云々  
催馬樂乃意云々一石河ハ河内國の郡名  
離を云々瑞よ云々云々  
放を云々云々意ハ云々云々神代紀よ毀と云々流

とほふつて世談字く ○靈異紀よの脱とよあり

相聚つて物語とるをいふ説文よ咄相謂也とんえり 無端の義あり

とて天武紀よ問王卿以無端事とんえ 莊子所無端崖之辞とんえり

花鳥の色音ふく常よ秋よあり四季花鳥とらふ事あり 春は梅は鶯

夏は郊の花は時鳥秋は菊小鳥冬は雪花は水鳥とらふり ○文集よ天竺未有密采

艶色者當時号花鳥使とんえり

湖潦倒翁色華功著潦倒切老とて一字改開く二字よ各よる也 是西域二合

の法也

はふがき 上東門院南良乃都の八重櫻を我櫻と名りんとて伊賀國よ余野と

らふ庄と寄て花垣乃庄と名け此木よ墻をせざるらん花の盛るとは七日つ直に

て是とちせしむる今よ彼庄寺領とらと砂石集よんえり 新續古今集よ承

仁大嘗會悠紀方并風よ花垣里

白妙の木綿とらとて神する卯月ふらふ花垣乃さや

○兼好集よらふ菩提樹院の藤も世余野村よあり伊賀郡也

古今集よやよひつごりりれ日花つとらうらる女とんえり

花供の用小野山よ出て摘とらふよみつね集よ花摘

鶯ははらふとらふ香よめてて秋つむ花はらふ

昔は春の内よたふとんふも野ふ出て花のらうとつて手向をてて无縁の靈

をさつとらふ事ありとらふ六帖よ

舟同よ花つむ人のほはてとて行らんやらつとら

花傑の春月草の花りて誇ふをらふ古今集れ世中の人の心は花

やめのとらふと六帖よつと草のとせり

餞をらふ致書よ多く馬のふむけとらふ旅は人の馬の鼻よ向ひ

餞別すふれ意く飲食よ餞とらふ貨財よ贖とらふ又代とらふと程儀ふと

はふらる

新撰字鏡よ噴嚏和名致とらふりしる餞の義あり

奥義故よはくしとるよはけふひるもせん半人乃事をわたりひさる小とあひ  
つれいあしとくわう古今集よ

出てゆく人ささめりしうみまに隣めくよはけふもひぬふ

顯昭の説よ人の所へ行んともよも隣の人乃嚏つれいせくし人い  
とあつとくしつ詩よ願言則嚏嬾真子よ俗説以入嚏為人説とらひ居家  
必用よ噴嚏とちの日の事ええより○枕草紙よとらひあるもの正月一日のつ  
めてさよよはけふひる人とええ袖中抄よ正月え日嚏れい長命乃祥と  
ひ傳ふとええより

はふぐより 丹鉛総録よ越中牡丹開時賞者不問親疎謂之看花局澤

國此月多有輕陰微雨謂之養花天とええより

何とれく雨よいふくぬ花曇咲つとらひ二月のま

さふのあよ 花の兄も梅をらふ諸木よ先よちて花くとしとてとてとて鬼

魁の名あり山谷水仙の詩よ山礬是身梅是兄ともええより菊と花の弟とらひ實

業卿

はふをまよ 花よぬ梅も咲りりしよのふよりとくくの花の後よも

はふをまよ 古今集の序よ花をよよとて便又ふと所よまよとらひ花は

諷のふよ又程明道の詩よ傍花隨柳過前川とらひ意よとらひ

さふよまよ 桃よのまよ朗詠の句よ天醉干花桃李盛也とええより丈夫集

う

天の川岸への柳や咲ぬらん空よ花の色よまひぬ

はふぐより 日本紀の秋よ橘よけくけく花の中よ珠よ愛たれく花細よ

一野く萬葉集よとええより

さふよつめ 鎮花祭をらふ公事根えよ是大神狹井の二祭をらふ神祇令

ふのせより又松尾の神社よあり和列三輪山の内よも鎮花の社あり花のちりよ春

の比の疫神今散し人をあやまんゆよ此祭ありとらひ又花鎮宮に訓郡

上久我村よあり新拾遺集よ

長閑あるまの祭の花よつめ風とさされとち行ゆ

はふのいと 鼻の糸の糸小児の守けみ青き糸つけて鬼の嚏を時くふと合

と代りて世系をむすふは是の乳母のあつては兒のくまひる時うごころの人  
鼻と合とて又うごころはけふ合せられ其嘔る兒は害ありとらふ故  
のまゝあひえといつる尼のやゝあひ君のよめよくせし事徒然草に云えり  
くまをつく  
俗に主君の前遠さるをうごころつた物語に皆くあつてくまを  
ぬとてえん袋草子よ、突鼻氣也と云えり

くまのおとく  
花の芽へ菊をいふ諸花は後まゝ花さき珠残花とも称する物也  
くまのいもや  
増基法師熊野紀行よりゆ有馬村へ伊弉册尊とくままつり  
る所といつる花時亦以花祭といつるは搦りて旗と造りむすひあつては柳とつ  
けて花とせり夫木集よ

神はつる花の時よや成ぬる有馬乃村よりくま白ゆふ  
けふやてや  
源氏小花や蝶やとくけいこやあつてはくまゆ枕草紙よ

みふ人の花やてやとくけいこも我心の君やとくけい  
くまよをれはく  
源氏よりゆ花よ心を折る俗に我をくまといふ

けふゆもく  
鼻とい紐のくまの長人は遠くまゝといひ方せり万葉集

まゆ根くま鼻の紐をけりてやまもいつるくまと思ふ我君  
くま  
日本紀に埴又土よりゆゆの略よいつらの十古語より埴は黄土也

と注せり万葉集よ黄土も赤土もあつ○老子に埴埴とは小を埴やとくま  
まきり  
はふ  
土師の字をよめりいづよむの略へいあるの養音よあつて土輪

おし造り初る後と土師氏と賜ひし事日本紀よ云えり○和名埴は黄  
土をよめり略していづともいつる○遊女土師の万葉集よ云えり又蒲生珠  
名按古等の致ものまきり

はふふ  
萬葉集よ黄土とよめりふ其ある所とらふ生の表也○埴生も訓同  
くま  
日本紀に埴輪亦る埴物と云えり垂仁天皇は時よ始まり私記に山陵  
縁邊作埴人形立如車輪者也云えり今諸国陵墓の古きより多く埴の致と立  
並つてその体車輪の如く埴よよめり理あり是所謂埴輪也○河州應神天皇  
の陵のくま播州仲哀天皇乃荒陵の花壺ふと称するも是也





秋有年俗云是米花也といふ明和の初年京大坂は五月の初灰ふりなり○古事  
仲哀記は真木灰納執亦著及比羅傳多作皆々散浮大海以可度といふ延喜式  
色料にも真木灰八斛とあり或は被灰よく魚を汚すといふ鎮火祭祀詞も更生  
子水神執云國語は夫苦飽不材於人共濟而已といふ少釋紀は葉盤柏葉盛  
物也と葉ふきもよく海は浮き著魚は供する意あり

はひさも 延指の糸あつまの紫はひききといふ万葉集ははひ後拾遺集は  
灰をかけるよせり

紫は八の海深なる藤の花池といひき物といふあり

この蓮の波悲哉とせり也

△ともふ 刺富をいふ虫よの岐行と又と蟲よの縁と見えり草木といふは延万葉  
集は延ゆ蔓短乃を塵辞といふも亦短といふなり○平家物語は鱈といふ魚二三  
とあり又平家の船の下と直といふて通るるといふは女帰はは通るあり  
あれは喰のや○屋造といふは和名抄は博風板といえり山城清水寺は

破風あり

はぶき 古今集は山やとくくはうちとくふきといふ羽振の義なるをふきと  
いふ古語○神代紀は羽翰といふは吹皮といふ鳥の羽を用ゐるなり

とふふ 和名抄は蕭といふ羽振の義は新撰字鏡はけりといふはねといふ  
万葉集朝羽振夕羽振といふ事も見えり○日本紀は溢といふありあつるは同  
續紀の詔はつる賜りといふ古事記の詠は大君と爲はけりといふは流  
まといふ古今集は身の捨つといふもといふといふは俗に物を捨つといふ  
ありといふ是れは羽振の義といふ日本紀は溢と羽振とを通りて書る事あり  
といふ古事記は打羽擧とも見え

はつる 神代紀は祝部をよめる姓氏録は建角身命之後也といふ熱田官符  
は神主外正八位下祝部宮麻呂といふ熱田宮の祝職の本土師氏也大祝といふ尾張  
氏祝といふは神饌の神供人也羽振の義羽の衣袖をいふ立すは袖ふといふ意  
ありといふ又鳥の羽振といふは秋あり萬葉集は葉をよめる神といふは  
と奉るともいふは神代紀の莖字といふはつるといふは讀といふは和名抄上野の郷名は祝人







基俊哥合の判よそりの神のくやの葉と守ふ神よあそびく  
弘仁式三綱柏の條よええとらうくれの葉盛乃神のをて實ハ御饌津の  
神をすすよや萬葉集よ

家よあれいけ小りの飯を草枕旅よりあれいさひのをより

越前氣比の神と日本紀筒飯とあるよるも世系ふも新古今集よ雨中木  
繁とらふ心を藤原基俊

玉よのふりりより五月雨よはりの神のよめとあるよ

漢書よ栢者鬼之延也

△はや

嘆乃辞よらう日本紀よあふよまよあぶつまよと吾婦者耶よ吾夫

何恰とよせり又秋よあうたくみよや万葉集よ君をふうりよや又年

とやあ相よふよ又折よや折人のよと同一源氏よの者よもれあや

と淡よ又五節よそらうたけあういよとええう拾遺集よ菅家

君よ住宿の木すをゆくとうくよとゆうりはや

○古今集よ今いはやいさふを拾遺集にたよとよと記よせよの類い言

のよの意○心よ人よあうば乃濁よ頼ひ乗ふ意のよ

○口語よらう便字を譯よ早よあう

はやす 又とやとくはやとりてやすいよと取とよふといふ映スハヤの

又やす互映のよ自他の異之○草木とよとらう今生のよ○音曲よらう今映

のよ呂氏春秋よ今人舉重出力者一人唱則為號頭衆皆和之曰打號とええり

音頭ハヤシ方とらふ節分の夜よ豆をくよとらふも是之○割烹よきりはやと

ふいひやとの轉あう○元服よ髪をくよとらうとく本をいひ反語あう

とや 林よあり生よのよとらう俗よとらうもらう○日本紀よ取舉棟梁者

世家長御心之林とらう萬葉集よ吾角者御心之はや吾突者みふのよ

といつ映す乃あう○林小林の姓ハ大平記よえい○能とやの囉字よとあ

と説文よ助舞声とええう年始乃風流をはや物とらう埃囊抄よとえ

鼓吹の意也鴨長明

林寄よりいいて通うと鼓乃嵩を打ふるは

林寄ハ伊勢の内宮よあり或ハ拍子の音轉とらう○早速とよむ羽夫のよ

助語ある一靈異記に過をよみより速くと注を神代紀に急峻をよりあり欽  
よ今にや秋ははやふとらより又とちとらよりとよりの意とむの意あり  
源氏にはやもええより新古今集辞よりとちよりとらいつの昔といえり如  
一出羽といえりといふ○姓といふ盛衰記にええり

とやち 神代紀に疾風又迅風又奔波書事記速飄和名抄に暴風とより今に  
やてく暴風は八月に風也陸奥とて難せりといふ馬家卿

はやふ 速を用いし辞之はやり男れり武者心のはやふといふ是れ物といひ  
はやりてしと詞寶物業にええり○世に流行する事をいふも速く行ふ意か  
るより時行とより又飛行といふ

とやたつ 八雲御抄に川をらふとえ喜撰式に若詠河時とたつといふとえ  
に速立のよも堀川百首に  
湊瀬ともやこもちぬとたつのみなきりける川のかくれ

此致は川といふれいもやたつに速滝津の畧とすもや

はやふね 和名抄に舸をよみより支鳥船鵠船あり今に關船に新千載集に

みりふ事湊にちふとや舟乃とちもあつねるもさか

とやふとや 初矢房矢ふる一矢二とちを一手といふ的矢といふ詞に西土  
の一手の矢四條とらほ物語に

うと羽ふる名乃おとやふもきこゆふいりつと比ふもある

とやさあめ 新撰字鏡に凍をよみより暴雨也といえり出雲風土記に波  
夜佐雨久多美山倭姫世記に速雨二見浦といふ皆枕詞に神名式阿波國勝浦  
郡に速雨神社あり

△はや 生字映字とよみり万葉集にはゆかといふり拾遺集に

あやといふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

△とら 原に日本紀に開をこつとらといふ意に筑紫入のころといふも

高天原蒼海原豊葦原といふ皆廣平乃をいふも万葉集に國原といふも  
よ原高平曰原人所登也といふ○日本紀に林ともいふり竹とら松とら檜とらといふ

ふ夏ことらるる ○腹ハ人身中の原とらるる一武備志ハ肚をよらるる ○夫木集為家

鈴鹿山関のささるる花薄袖よりけくたきまねくらむ

是ハ関の近とあらるる原村あり野廣く薄多き所ふれいよるるさるる一 ○神代紀

一癩とよらるる人の腹ハ似さるる西土より瓶之大腹小口ふとさるる一 ○源氏小

五六のささるる撥刺とらるる琴の手ハ五六ハ絃とらるる一絃ハ散声一絃ハ按声二絃ハ

声れさるる彈さるるをさるるさるる ○姓ハ原ある花營三代紀よみゆ

はらむ 妊娠とらるる日本紀ハ妊身所懐所娠有身有腹ふとをよらるる腹産

のさるる ○埃囊技ハ人の母胎ハ在時第廿の七日ハ至て人相皆備ア手と以て面と

推て蹲踏一と坐すといつる禁河の書守混沌之始の傳ハ同ハ ○系圖とらるる何

腹とらるる日本紀續日本紀ふとさるる母家よりて氏族の別とさるる

辞ハ ○俗諺よさるると踰てもけくむといふ中よりハ袴のゆらら日本紀ハ易産

腹者以禪觸躄即使懷胎ハ又さるる善見律ハ懐胎七種と立て一者身相

觸二者取衣といふ

はらむ 和名故ハ鰓魚とよらるるこれハ所出未詳といひたり新撰字鏡同ハ

又黿と訓せり江次第官曹事類風土記ハ鰓也といふ式ハ腹赤とさるるふあ  
音こもさるるをりてつとらるる腹黒のふあれハ腹赤の贅を奏するも赤心の表示  
ふと一神代紀ハ赤心をきよれたらるるとよらるる元日ハ腹赤の贅の奏あるハ聖武  
天皇より始りる年中行事の歌ハ

さるる春乃千代のたれハの長濱ハけさるるつとらるる我君けさるる

長濱ハ肥後国ハあり玉名郡長渚濱より出て赤倍魚と号と今北濱ハ鯛を焼

て賣りるる景行天皇の政事ありハ風土記ハさるる今其所と腹赤といつる供

御の池あり ○伊弉国河曲郡ハ長太村あり此村より大神宮ハけさるるの御贄と

献を轉也 ○東原腹赤後姓と改め都ハ三代實録ハ又ハ二人とすハ非

はらむ 神代紀ハ驅除又撥又拂をよらるる羽より出さるる詞ありハ新撰字

鏡ハ件をよらるる除也と注さるる

はらむ 神代紀ハ解除又被とよらるる廣韻ハ音拂と又ゆ毛詩ハ被と弗ハ

作ふさるるいふつの音ありを被と通用わらるるつとの音とせり訓ハ拂ハと名目ハ

神代紀ハさるる伊弉諾尊素戔鳴尊二大神の御さるるを合せりハ後除身淋

の法して人の世も行く○（と）とふ時（令）被（た）の事いせ及（ま）さる人（は）被（た）の  
 一む○（と）つ物（ハ）日本紀（ハ）被（た）柱又被（た）具（ト）とあり伊勢物語（ハ）の具（ト）の  
 了○新撰字鏡（ハ）被（た）葵（ト）とは（ハ）まつる（ト）又被（た）言（ハ）の（ト）とあり  
 ○被（た）敷（ト）をやぶ（ト）とあり○日本後紀（ハ）定（ト）唯（ト）犯（ト）科（ト）被（た）上（ト）被（た）中（ト）被（た）  
 下（ト）被（た）等（ト）とある復（ト）仲（ト）紀（ハ）惡（ト）解（ト）除（ト）善（ト）解（ト）除（ト）とあり（ト）事（ト）ありて（ト）神代（ハ）の（ト）言（ト）爪（ト）棄（ト）物（ト）  
（ト）凶（ト）爪（ト）棄（ト）物（ト）の名（ト）本（ト）け（ト）善（ト）惡（ト）二（ト）つ（ト）被（た）延（ト）曆（ト）中（ト）至（ト）大（ト）小（ト）中（ト）下（ト）の（ト）四（ト）等（ト）とあり（ト）貴  
 詳（ト）ある事（ト）ハ（ト）令（ト）集（ト）解（ト）とあり○被（た）除（ト）の（ト）修（ト）法（ト）被（た）解（ト）繩（ト）一（ト）撫（ト）一（ト）响（ト）等（ト）の（ト）事（ト）ありて  
 江（ト）次（ト）第（ト）二（ト）と（ト）解（ト）繩（ト）ハ（ト）中（ト）臣（ト）被（た）の（ト）舳（ト）艦（ト）解（ト）放（ト）の（ト）意（ト）一（ト）吹（ト）の（ト）意（ト）一（ト）撫（ト）ハ（ト）佐（ト）領（ト）良（ト）比（ト）  
 意（ト）あり（ト）○後（ト）一（ト）條（ト）院（ト）乃（ト）時（ト）七（ト）度（ト）被（た）とあり（ト）事（ト）野（ト）府（ト）記（ハ）とあり（ト）是（ト）數（ト）被（た）  
 の始（ト）め（ト）あり（ト）安（ト）德（ト）天（ト）皇（ト）の（ト）前（ト）後（ト）より（ト）千（ト）万（ト）度（ト）の（ト）被（た）の（ト）事（ト）ハ（ト）代（ト）の（ト）ま（ト）とあり（ト）  
 佛（ト）の（ト）經（ト）を（ト）轉（ト）讀（ト）とあり（ト）習（ト）とあり（ト）是（ト）皆（ト）陰（ト）陽（ト）師（ト）の（ト）所（ト）業（ト）あり（ト）○伊（ト）勢  
 の（ト）かり（ト）ひ（ト）ぐ（ト）り（ト）の（ト）被（た）串（ト）と（ト）配（ト）とあり（ト）撫（ト）物（ト）の（ト）遺（ト）風（ト）とあり（ト）後（ト）陽（ト）成（ト）院（ト）の（ト）比（ト）より（ト）の  
 事（ト）とあり（ト）○越（ト）後（ト）國（ト）新（ト）河（ト）の（ト）あり（ト）一（ト）愚（ト）人（ト）あり（ト）河（ト）辺（ト）に（ト）小（ト）便（ト）する（ト）あり（ト）ひ  
 流（ト）束（ト）ふ（ト）と（ト）小（ト）便（ト）と（ト）あり（ト）伴（ト）人（ト）是（ト）と（ト）制（ト）とあり（ト）流（ト）束（ト）ふ（ト）と（ト）あり（ト）ひ（ト）と（ト）登（ト）

つらゝ忽ち步行する事ありと其友其父をつとまて家へ帰るゝ途中より  
 臭氣不可堪一て一身くさつて不日して死るゝ也  
 けす  
 らあ互る殺の事ありてわしひをくゝとれとらあ令殺の意也  
 たりか  
 日本紀ハ母弟をよめり女兄も同一同母とら自腹の系腹族は同一  
 胞とらうとて親々もちち仁賢紀ハ異父兄弟とけりかのあまんととよ  
 み續日本紀ハ父母とらうとらえり同母兄弟の系之真名伊勢物語ハ明比とち  
 る何は括とらあ○ちちうこれ関ハ後拾遺集とらえてみちの国とらうとらかり  
 の関と同一きとや  
 ちちぐろ  
 袋草紙ハ腹黒の事とらえり又けきとらあてり神代紀  
 ハ黒をきとらあてり金葉集ハ  
 花とらあてりあわゆる人のふりたるあかりとらあけ君のうみや  
 はくく  
 神代紀ハ散をよめりあうらくと通つ書萬頁よて壊をえりけ  
 りとらあも同一又散とらうとらあてりあかりかす及く之万葉集とらあてりあをみけら  
 一浮てとらあも同一

和名抄の勒肚巾をとりり腹纏と西宮抄裏書よま一扶桑畧  
 記大原野行幸鷹狩諸衛官人著褐衣腹巻行騰と見えり○兵家よら  
 鎧の敷也胴の板を小さくしり鎖にてけ疊具豆のてりり綿嚙のりこ  
 鏝番よ  
 みて前よりあて着し後より引合せ紐を結ぶ庭訓は宿直腹巻又ゆ番具豆  
 とらふとらり○船のてりりと廻しちむ網とらり

和名抄の張をとりり兼好なれはしき事いぬ腹ふくあてり  
 東坡忍事腹巻とらり是は出羽の俗の腹がつけり

針とらり鍼も同一穿れ轉てりり名義集よ曲鈎を翻して婆利と

家の材具也大殿宗の梁をとりり○梵の頰黎とらり水晶とらり本草よ別よ出せ  
 又らりやの内の一國よ所造玻璃極佳甲于天下と見えり世方よ水精の琢磨  
 とらり頰黎の琢磨とらり俱よ五色ありて其品かのつらふてりり○世よ浄頰黎  
 の鏡とらり佛經よ見えり碧頰黎鏡の梁四公子記よ見えり又頰黎鏡とらりまも物  
 又千里鏡磨玻璃所成者と云字通よ見えり琢磨とらり

又中山傳信録よ今西洋船用玻璃漏定更簡而易曉と見えり

禁秘抄よ張兒と見えり今このてりり○張籠の義もあり脱絛のりや

○兎女のりてあまの犬けりて誓禮の具の御と記の犬ふりて吠ふ大代の故事よ見えり

播磨とらり古事記よ針間とらり新猿樂記よ播磨針とらり赤添衛門  
 集よ見えりまよりまふ入針をたてりり見えり針よ見えり相撲の  
 むよ見えりまふげあり

赤とらり破邊の岩はけんふておのてりり仲津白ふり

日本紀よ秦摺衣と見えり大嘗會式よ漆藍摺錦袍と見えり漆摺  
 とらり山藍摺と二事ありや

春の發の義万葉集よ春の張作と見えり後の秋よこのめりりあてりり  
 ○秋の類よ初春早春と見えり早春初春とも次第せりり同意あり○壺とよ  
 心も發開の義治をとりり玉菰よ壺の治也と見えり張も發の義皮よ幾張あり  
 して又鼓よ見えり周禮よ鞞鼓と見えり冒鼓も同一冒音曼也○倭名抄よ府菴腫

をよむも亦同一 ○發の開とるきとよむの亦也 ○私ふとるどらふ貼字く ○古人の名も春風月影兄弟の名いと艶也 魚名公の曾孫也 ○人を打とるどらふも張の意ふも一 良基公榊葉日記に神人をとるひうらむと一なるかこえゆ ○名も玄とよめるいんるの亦へ ○やううらつてくるさけるあくの助語よらふとの音のくーひふ反ふ也

はるき 日本紀の開をよめるあゝくく音通たり

くく 暗をらふ開晴の亦へ ○新撰字鏡に霽をひくれぬとよめる雨止てくみく也

くく 遥をよめる悠も遐も同一又懸もよめる開字は意致よるけきとも

よめる日本紀よ玄もよめる靈異記よへくくもえゆ

とるこれ 万葉よ春之在者とさるく又くるさるこればもよめるあ反ふとさと濁りよむへあー ○秋とるが冬とるの詞ありて夏とるの詞ふータとるがあて朝とるがとるえとさー

くく 呂の調とらふ催馬樂乃呂新羊梅枝櫻人ふくえとさる

はるをあくれ心 源氏よ女の春をあくれ心とえとさる詩よ有女懐春古士

誘之ととさる

これ 俗よこれの衣服これの座席ふくは法例の亦へ ○語の辞ふも

いつり催馬樂よえとさる ○晴腫ふとをらふもとる也

くく 皇極紀の效よとらつて琴やとこゆる万葉集よとらつてた

ゆへゆるもとえゆ皆遺也

くく 安閑紀よ備後國葉若也倉あり東鑑よ伊勢國葉若とえとさる

鈴鹿郡の邑名也神馬抄ととる也

くく 源氏よかんや紙よわの綺をこわしてとえゆ袷襟の襟ふく配よ

ても通せり

くく 配所とらる配流の所次らるを罪なくして配所の月次とらるぬとらる

い心ある言と河海と野相公在納言菅家西宮左府帥内大臣拔群の才次りて罪

ふくして配所の月よ振く人勝て計ふとらる

くく 日本紀よ蝕字を訓せり日月の蝕の虫の木葉を食ふとらるふれの食餅の

みろまゝ一俗よ名をみろまゝと云ふ。日蝕月蝕に禁裏御坐の間を包みしめしむる事御湯敷の記よるをえり。○舶来の品よ兩蝕儀あり

△とふき 羽音の系也新撰字鏡に翫をとねふと云ふなり

倭訓栞前編二十四終





